

## 山梨大学看護学会誌第3巻1号発行に寄せて

山梨大学看護学会副会長

山梨大学医学部附属病院看護部長 大村久米子

本学会は平成11年に設立され、学術集会は平成16年度に第5回を開催することになりました。大学は今年度より大学法人化になり、更なる「質」が求められ、ますます厳しい時代になりました。

この4月より医師の卒後臨床研修が義務化され、日本看護協会通常総会では看護師の卒後臨床研修の実現に向けての活動が提案されました。看護研究の意義が「社会のニーズに対応すべく、看護師、保健師、助産師と教育・研究者が一体となって専門的情報を交換し、知識を深め、科学的な根拠に基づいた技術の開発等を生み出し、臨床の看護に繋げることである」と言われているように、臨床の実践者は、日々の看護実践の中から疑問や問題状況を出し、疑問を解決したり、問題状況を明らかにするために解決の手がかりを求めべく研究に取り組んできました。しかし、臨床看護師の看護研究の困難さは、ハードな勤務体制で研究を行なわなくてはならない等、勤務形態の複雑さや研究の指導者がいない等の問題を抱えていました。幸いにも当院は、看護学科と臨床との連携がスムーズであり、臨床側としては、看護学科教官から多くの協力が得られ、看護研究を推進していく上で心強いものがありました。大学内の連携は、臨床と教官との協同研究や研究指導、学生の研究のフィールド提供であったりとギブ・アンド・テイクの関係がつけられたことは喜ばしい結果でもあります。看護実践・理論・研究をつなぐにあたり、

臨床の実践者は、実践者だからこそ見えてくる疑問や問題状況があり、臨床の看護の問題を取り上げ、臨床に根ざした看護研究に取り組む意気込みはあるものの、文献検索や研究方法等かなりの指導を受けなくてはならない現実もあります。

学会発表から会誌への投稿には、かなりのエネルギーが必要です。研究を多くの会員に理解していただくために、論文作成は査読を経ての作業が研究意欲を阻害するのではなく、次なるエネルギーになる関わりが望まれます。臨床での変則勤務中での研究活動は決して楽しい、充実感に到っていない現実があります。勤務の考慮、アドバイザーシステムの構築、研究の助成等の経済的支援獲得等に多くの課題があります。

当学会は平成15年度から優秀な研究に対して奨励賞を出し、更なる研究を奨励しています。研究を学会誌に発表したり、また奨励賞に繋がる等、次の研究への動機づけにしたいものです。学内での研究発表は立場を超えて建設的なディスカッションをおこないながら、臨床では研究の成果を吟味して、または結果を検証することを通して、看護ケア・看護学の発展、臨床看護の水準の向上へと繋げたいものです。

より良い看護サービスの根拠を明確にするための看護研究を推進してまいりましょう。